純ちゃんのコーナー

（ロータリー３分間情報）

Part Ⅶ

伊丹ロータリークラブ

深　川　純　一

目　　次

1．『クラブのテリトリー Territory』その１ ……2
2．『クラブのテリトリー Territory』その２ ……3
3．『クラブのテリトリー Territory』その３ ……4
4．『クラブのテリトリー Territory』その４ ……5
5．『クラブのテリトリー Territory』その５ ……6
6．『クラブのテリトリー Territory』その６ ……7
7．『ロータリー寛容論』その１ ……8
8．『ロータリー寛容論』その２ ……9
9．『ロータリー財団』その１ ……10
10．『ロータリー財団』その２ ……11
11．『ロータリー財団』その３ ……12
12．『ロータリー財団』その４ ……13
13．『ロータリー財団』その５ ……14
14．『ロータリー財団』その６ ……15
15．『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１ ……16
『ロータリーの神髄』……17

序に代えて

竹中秀夫会員の発想で始まりました拙話『純ちゃんのコーナー』に就きましては、昨年度もロータリー情報委員長船本洋会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満７年の歳月を閲することになりました。毎年のことながら、例会での３分間スピーチをどのような内容でロータリー情報を説けばよいのかということを模索しながら徒に馬齢を重ねてしまった感があります。顧みて、内心忸怩たる思いでございます。

ところで、何故、ロータリー情報なるものが必要なのでしょうか。或る人は「ロータリーは毎週一回例会に出ておれば解る」と言いますが果たしてそうでしょうか。

私が伊丹ロータリークラブに入会したのは1973年３月であります。その月のガバナー月信は、西宮甲子園クラブから出た古河滋（しげる）ガバナーの月信３月号でありましたが、その巻頭言に書かれていたスエーデン出身の元国際ロータリー会長ブライトホルツさんの言葉に強く惹かれたのであります。即ち、その月信の巻頭言で古河ガバナーは、『元ＲＩ会長のブライトホルツさんは、３月２日夜のＲＩ第366地区大会（大阪）の懇親会で「私は20数年間ロータリアンであるが、未だロータリーとは何かがよく判っていない」と謙遜された。涼しい心境である。』と述べておられたからであります。

この言葉からは元ＲＩ会長のお人柄とロータリーに対する思いの深さが感じられます。 当時、私はロータリーに入会したばかりでありましたが、永年ロータリーで研鑽に励んだ最高の指導者にして未だロータリーは未知なるものなのかと不思議にも思い、ロータリーというものの奥の深さを知らされたのであります。この故に、やはりロータリアンはロータリー情報を身につけなければならないと思うのであります。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を15回しか話すことが出来なかったため、その内容が非常に乏しくなってしまいました。そこで、今回は15回分の話に加えて、今年の２月17日、神戸ポートピアホテルにおいて開催されました当地区主催のロータリー教化セミナーで私が地区研修リーダーとして話した『ロータリーの神髄』の一文を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

終わりに、この一年間、私の拙い話を辛抱強く聴いて下さったクラブの皆様方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、この小冊子の発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員、船本洋会員はじめクラブ事務局の人達に心からなる感謝を捧げ、ペンを擱きます。有り難うございました。

2008年７月　　深　川　純　一

1.『クラブのテリトリー Territory』その1

標準クラブ定款第3条には、「本クラブの所在地域は次の通りとする」として、所在地域即ち、Territoryを規定しています。当伊丹クラブの所在地域＝Territoryは伊丹市全域であります。したがって、クラブとしては、伊丹市全域にわたって奉仕活動をすることができますが、そのTerritoryを越えて他のクラブのTerritoryで奉仕活動をすることは出来ないのであります。もし、伊丹クラブが自分のTerritoryを越えて、他のクラブのTerritoryの中で奉仕活動をする場合には、相手クラブとジョインプログラムを組まなければならず、その場合は、ガバナーの承認を得なければならないのであります。

このように、Territoryは、クラブの活動限界を決める機能を持っているのであります。したがって、クラブは、Territoryを越えて奉仕活動することは出来ないのであります。

近年、行政の分野では、広域行政とか市町村合併とかが議論され、また現に実施されてもいますが、これは、行政の組織の問題でありまして、当然のことながらロータリーの組織論とは全く関係のないことであります。行政の世界が広域になったからと謂って、ロータリークラブの活動も広域にならなければならないという論理はないのであります。ロータリークラブは、全世界のクラブが共通にもつ標準クラブ定款の第3条によって、クラブの活動範囲＝Territoryがピシッと決められており、クラブがその範囲を越えて活動することは、相手クラブの自治権侵害になるのであります。

しかし、これはクラブとしての奉仕活動即ち、団体奉仕の場合の問題でありまして、ロータリアン個人としては、一切Territoryの制約を受けません。何故かと謂いますと、ロータリー運動の本体は個人奉仕であり、個人奉仕は世界中何処ででも実践出来るからであります。伊丹クラブのロータリアンの親睦のエネルギーがロンドンで花咲くこともあるのであります。現に第1次世界大戦の時に、アメリカのロータリアンはTerritoryの外であるヨーロッパ戦線で個人奉仕をしているのであります。したがって、Territoryというものは、ロータリアンの側から見る限り、あまり重要ではないのであります。

では、Territoryが重要性を帯びて来る視点は何かと言いますと、それは国際ロータリーの側から見た場合であります。即ち、国際ロータリーの側からは、その構成員であるクラブを認証していくと謂う立場から、クラブの活動限界をピシッと定めておかないと、クラブ間の紛争が起こったときに困るという考え方があるのであります。

要するに、Territoryは、国際ロータリーの側からは重要でありますが、ロータリアンの側からは、あまり重要ではないのであります。それは、ロータリアンの個人奉仕はTerritoryの制約を受けないからであります。

2.『クラブのテリトリー Territory』その２

前回は、ロータリークラブのTerritoryは、国際ロータリーの側から見ると重要な概念ではありますが、ロータリアンの側から見るとあまり重要ではないと申し上げました。即ち、国際ロータリー（ＲＩ）の側からは、その構成員であるクラブを認証していくと謂う立場から、クラブの活動限界を厳格に定めておかないと、クラブ間の紛争が起こった時に解決できないということになるのであります。

例えば、1909年にロサンゼルスロータリークラブが二つ同時に出来てしまったことがありました。そこで、この二つのクラブがお互いに自分のクラブが本家だ、正統だと言って主導権争いをすることになりましたので、これに懲りて、どちらのクラブが正統なクラブであるかということは、国際ロータリーからチャーターをもらった方のクラブを正統なものとするということになったのであります。これがチャーターの理論でありまして、現在のチャーターナイト・認容状伝達式は、このようにして始まったのであります。

そして、ロサンゼルスの二つのクラブの場合は、第１号案件でありましたから、どちらのクラブが正統だとも決め難いので、仕方がないので二つのクラブが合併するという形で解決したのであります。したがって、このクラブは、当初一業二会員制をとらざるを得なかったのであります。そして、時日をかけて、一業一会員制に修正して行ったのであります。これが、国際ロータリーの側から見たテリトリーの理論であります。

したがって、クラブを作るときには、国家の場合とパラレルに考えるとよく判ります。

第１に、テリトリー。これは国家で言えば領土に当たります。

第２に、クラブ会員。これは国家で言えば人民に当たります。

第３に、定款・細則。これは国家で言えば法律に当たります。

この三つの要素がないとクラブを作ることが出来ないのであります。したがって、国際ロータリーの側から見ると、テリトリーは非常に重要な事項なのであります。

このように、テリトリーの概念は、ロータリアンというロータリー運動の本体から見る場合と、国際ロータリーが各クラブを管理するという直接監督権の行使の側から見る場合とでは、全く意味が違ってくるのでありまして、この点を理解しておかなければなりません。ロータリー運動の本質は個人奉仕であります。したがって、世界中何処ででも実践出来るのであります。したがって、テリトリーは、ロータリー運動の側から見る限り、あまり重要な概念ではないということになるのであります。

3.『クラブのテリトリー Territory』その3

テリトリーというものは、一体どのようにして決められてきたのか、テリトリーの本質については議論があります。

元来、テリトリーは、最小の行政単位でありました。しかし、何時までも最小の行政単位でもってテリトリーの概念を割り切ることが出来るのかという問題があります。

先ず、行政の基本単位というものは、地域社会で形成します。例えば、村落社会を見ますと、家が何軒か建つと、その中に豆腐屋が一軒、八百屋が一軒、魚屋が一軒、鍛冶屋が一軒出来て、そして、子供を教育するために学校が出来て、治安を維持するために駐在所が出来て、宗教のシンボルとして寺や教会が出来るという形で地域社会が出来上がっていきます。

そうすると、この地域社会が経済的にも、文化的にも、宗教的にも一つのまとまりを持って来ます。これを community と謂うのであります。

communityの範囲については、ヨーロッパでは、教会の鐘の音の聞こえる範囲であるとか、アメリカでは、幌馬車で往復できる範囲であるとか謂う説があります。

何はともあれ、このようなまとまりが出来た時に、行政単位を作り、これをテリトリーとしたのであります。そして、幾つかの行政単位がまとまって更に上部の行政単位が出来ます。例えば、村が集まって町になり、町が集まって市になり、市が集まって県になり、最後に、権力構造上、最高権限をもった国家がこれを掌握するという形をとっているのであります。

実は、ロータリークラブがテリトリーを構成するときに、この行政的な区画をもって、自分達の活動限界と考えるのが最もやり易いだろうという安易な判断をしたことは、紛れのない事実なのであります。この事実は、開発途上国であるアフリカとか、中南米諸国の一部になると今日でも厳然として存在しています。

ところが、ヨーロッパとかアメリカのある種の社会だとか、日本のような Macro の Megalopolis（巨大都市）になりますと、経済機能、社会機能が重層的に重複した形で発展します。そうすると、これに対して、ロータリークラブは、従来の行政単位中心のテリトリーの枠組みの中からロータリークラブを作って行っていいのかという問題が、第2次世界大戦後の顕著な問題として起こって来たのであります。即ち、communityの機能の限界が判然としなくなって来ています。例えば、大阪府と兵庫県は行政的には分かれていますが、経済的には一体であります。これが問題であります。

4.『クラブのテリトリー Territory』その4

前回は、日本のようなMegalopolis（巨大都市）では、経済機能、社会機能が重層的に重複した形で発展しますから、この場合、ロータリークラブは、従来通り行政単位中心のテリトリーの枠組みの中からロータリークラブを作って行っていいのかという問題が第2次世界大戦後の顕著な問題として起こって来たということ、即ち、community・地域社会の機能の限界が判然としなくなって来ているということを申し上げました。

ロータリーは、経済的な目的をかなり主眼におく活動でありますから、本来、経済単位を重視しなければならないにも拘わらず、最小の行政単位をテリトリーとしています。これは何故かと言いますと、昔は、行政単位(例えば伊丹市）が経済単位（経済活動圏）でもあり、社会単位（地域社会）でもありましたから、その内の一つを採れば、後は全てイコールでありました。したがって、その限りでは問題はなかったのであります。

ところが、社会が発展しますと、行政単位が必ずしも経済単位と一致せず、経済単位が必ずしも社会単位（community）と一致しなくなりました。これがMegalopolis（巨大都市）であります。大都市のビル街を見れば、政治的、経済的、社会的に色々な関係が重層的に重なり合って社会の実体が出来上がっていることが判ります。その結果、このような社会には、住民相互のcommunicationがなくなってしまうのであります。

元来、communityとはcommunicationのある社会のことであります。Community に住民間のcommunicationがあるからこそ地域社会に対する奉仕があるのでありますが、そのcommunicationがなくなると地域への奉仕は成り立たなくなるのであります。

私達は、社会単位としてのcommunity地域社会即ち、地域生活共同体の意味するものは一体何か、ということを考えてみなければならないと思います。

今から約27年前、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生がガバナー月信第3号(1980.8.15発刊)に、興味ある記事を書いておられますので紹介しておきます。即ち、

今井先生がマンチェスター郊外のある町を訪ねられたところ、建物は2階建ての集合住宅ばかりでありました。今井先生が、その地区の青少年奉仕委員長のロジャー・ウォーリーさんにそのわけを聞いたところ、『以前は、高層アパートを建てていたのだが、それでは住む人達の心が通わないので community が作れない。そこで、最近は、市議会が2階建より高い建物を造らないことを決めたのです』と謂うことでありました。

これは傾聴に値する意見であり、彼等は、community を非常に大事に考え、その community をより良くするために何が出来るかを考えているのであります。

5.『クラブのテリトリー Territory』その5

前回は、communityとは、communicationのある社会のことであると申しました。ところが、現在、communicationがなくなったためにcommunityが崩壊しつつあるのであります。それは、先ず、村落共同体に個別化の現象として現れました。即ち、

昔は、村落共同体即ち地域社会には、祭があり、盆踊りがあり、色々な行事があって、地域社会即ちcommunityの人達はそれなりのまとまりをもっていたのであります。

しかし、やがて、他の地方からの人口の流入による構成員の個別化、核家族化の現象が起こり、また、逆に地域社会からの人口の流出による過疎の現象によって、村自体の色々の機能を喪失して行きました。その結果、地域社会にcommunicationがなくなってしまいました。果たして、これをcommunityと謂えるかどうかが問題であります。

一方、都会はどうか、と謂いますと、人口の都市集中によって、経済単位としては、一つのビルだけで1クラブが成り立つ状況であります。一つのビルだけで40の職業分類が成り立ち、1クラブが出来上がります（例えば大阪市北区)。しかし、そこにcommunicationはありません。これを地域社会即ち、communityと謂えるでしょうか。一つの行政単位の中に幾つもの経済活動単位即ち、企業が重なり合って存在します。しかし、その中に住居即ち、夫婦親子の生活共同体はありません。したがって、小学生が居なくなります。1 community＝1テリトリーとして、テリトリーを細分化してみても、そこにcommunicationがなくなってしまったという現象があります。

一方、視点を変えてグローバルな視点で見ると、communityの拡大の現象もあります。Communityとは、communicationのある社会でありますから、経済単位としてのcommunityは、今は経済活動圏として拡大されています。例えば、私達が昔から日本の伝統として食べてきたものでも、気がついてみると、正月の鯛はアフリカから、蕎麦はカナダから、海老はインドから、蛤は韓国から来ていると謂う時代になっています。これは、実は、世界全体が私達のcommunity＝生活圏であることを示しているのであります。この場合、地域性はありませんが、逆にcommunicationはあるのであります。したがって、世界社会奉仕WCS(World Community Service)は、グローバルに考えて、世界社会を一つのテリトリーと考えるのであります。しかし実は、それはテリトリーがないのと等しいのであります。では、テリトリーがなければ団体奉仕が出来ないではないかと謂うと、正にその通りであります。したがって、ロータリーは、世界社会奉仕というものは、本来個人奉仕でするべきものと考えているのであります。

6.『クラブのテリトリー Territory』その6

前回申し述べましたように、最近のような大都市の高層化、個人の孤立化の現象は、community の崩壊を意味しています。心が通わなければ、即ちcommunicationがなければ、communityは作れないのであります。その community をより良いものにするためにロータリークラブがあるのであり、そのためにロータリアンが居るのであります。

したがって、ロータリアンは、community をより良いものにするために何が出来るかを考えなければならないと思います。ところが、私達は、日常、会社関係、取引関係、学校関係或いは自治会関係等色々な分野で、それぞれの仲間の中で生活をしていますが、その仲間と一緒に community を作っていくという意識はあまりないのではないかとも思うのであります。しかし、本来、地域への奉仕とは、自分が今生きて生活している場をどのようにして創り上げていくかということに他ならないのであります。

以上のように見て来ますと、社会の発展により、経済社会が重層的な構造をとることによって、一方では社会単位としての communityの崩壊の現象があり、他方では経済単位としての community の拡大という現象を見るとき（行政単位と一致しない）、ロータリーが何時までも、最低の行政単位という一枚看板をもってテリトリーを割り切ることが出来るのかどうか、という大変難しい問題に遭遇するわけであります。したがって、此処では問題点を指摘するに留めておきます。

ただ、しかし、ここで見失ってはならないのは、ロータリーの奉仕の本質は個人奉仕であると謂うことであります。個人奉仕というのは、個々のロータリアンが何処のクラブに所属しても、自分の現在地を奉仕の実践の場と心得なければならないと謂うことであります。したがって、テリトリーの概念は、ロータリー運動の本質即ち、個人奉仕から考えると、必ずしも本質に直結した概念ではありません。一種の技術概念であります。したがって、本質的でないものは変更できるが故に、テリトリーに関する事項は規定審議会事項なのであります。したがって例えば、1983年の規定審議会の決議によって、ロータリークラブのテリトリー外であっても、同一市内もしくは隣接クラブのテリトリーに事業場か住居を持っている人をクラブに入会させることが出来るようになっており、これは、ロータリーが職業人の集まりであることから、行政単位としてではなく、経済単位としてテリトリーを捉えようとする考え方の現れなのであります。

以上を要するに、テリトリーは方便の問題でありまして、一業一会員制の原則のような本質の問題ではないのであります。

7.『ロータリー寛容論』その1

先ず、1905年にシカゴロータリークラブが創立された当時は、世のため人のための奉仕などという考え方は全くありませんでした。そこには、クラブ会員が皆で仲良く助け合う親睦だけの世界がありました。

しかし、やがて、自分達だけが仲良く助け合う利己的なクラブは長続きしないだろう、クラブが地域社会で発展するためには、世のため人のためのことも考えるクラブでなければならないという考え方から、1907年以降、ロータリークラブに世のため人のためのことを考える奉仕という考え方が生まれてきたのであります。

そこで、ポール・ハリスは、クラブの中で奉仕の重要性を提唱し始めました。ところが、ロータリークラブは、元来、皆が仲良く助け合う親睦だけの世界でありましたから、ポール・ハリスの奉仕の提唱は、多くの会員との間に軋轢を生むことになりました。

しかし、ポール・ハリスは奉仕を説くことを止めませんでしたので、クラブは荒れに荒れたのであります。そして、やがてクラブが崩壊寸前の危機に瀕したのであります。 結局、この危機は、チェスレー・ペリーが全米ロータリークラブ連合会を創立することによって回避され、ポール・ハリスは、全米ロータリークラブ連合会会長として暖かく迎えられることになったのでありますが、彼は、大いに反省するところがありました。**クラブを崩壊の危機にまで追い込んだ自分の考え方の誤りは一体何処にあったのか？**

ポール・ハリスは、1907年から親睦団体であるクラブに奉仕の概念を入れようとしましたが、この時の彼の考え方は、**『始めに親睦ありき』**、その上に高次の概念としての**『奉仕』**が出てきたのであるが、これが親睦より高次の概念である以上は、それが親睦と相容れない時には、**親睦を抑えて奉仕が生きるべきだと謂う立場をとったのであります。**その結果、当然のことながら、**クラブ親睦が崩壊してしまったのであります。**

そこで、ポール・ハリスは、ロータリーにおける**親睦と奉仕とを上下の関係**において捉えたことの**誤り**に気づきました。**『親睦と奉仕とは、等位の概念として捉えるべきであった。この両者はロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。即ち、親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る』**と。

即ち、ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。**自分の考え方を人に押しつけてはならない。**したがって、**人を責めてはならない。**ロータリーはこのような思考の世界の中にある。これがポール・ハリスのロータリー寛容論であります。

8.『ロータリー寛容論』その2

ポール・ハリスは、1910年、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿ると悟ったのでありますが、彼はその気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Rational Rotarianism"であります。

これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というものは、どのような特徴を持った思考なのか、と謂うことを解説したものであります。

ポール・ハリスは、1910年、全米ロータリークラブ連合会の初代会長に選任せられた時から稿を起こし、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だロータリーの機関誌というものがありませんでしたので、これを発表する場がありませんでした。そこで、チェスレー・ペリーに相談したところ、チェスレー・ペリーは喜んで、彼が編集委員長になって出来上がったのが、"The National Rotarian" 誌でありました。これは、やがてロータリーが国際的に発展するに及んでNationalと謂う言葉が消えて現在の "The Rotarian"誌 となったのであります。

これが、この論文を巻頭論文としたロータリーの公的機関誌創刊号発刊の物語であります。時に、1911年1月26日のことでありました。

このため、国際ロータリー理事会は、古くから1月26日を含む1月最後の1週間を【雑誌週間】と名付けて、ロータリーの公的機関誌である"The Rotarian" の購読を勧誘するスピーチを全世界のロータリアンにして貰いたいと提唱してきたのであります。

ところが、今から約20年ほど前にこれが4月に変更になり、しかも【雑誌月間】となりました。その理由を国際ロータリー事務局に問い合わせましたところ、単に事務管理上の都合と謂うことでありました。このようにして、ロータリーの由緒ある記念すべき日が忘れ去られて行くのは誠に残念なことであります。

ところで、ポール・ハリスはその巻頭論文に曰く『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】（toleration）と答えるであろう』と。

これがポール・ハリスのロータリー理論、即ち、ロータリー＝寛容論であります。したがって、彼は『ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る』と説いたわけであります。したがって、ロータリーが思考の体系として、その外延（外堀）を確立したのは、1910年にポール・ハリスが『ロータリーは、寛容の中に宿る』と自覚した時であります。この時にロータリーの思想の原点が据えられたのであります。

9.『ロータリー財団』その1

国際社会に対立している国家間の紛争を個人の善意をもって解決していこうというのがロータリーおける国際奉仕の実践でありますが、ロータリーは、第一次世界大戦の最中にあって原理的に奇妙なものを作り上げました。これを**ロータリー財団**と謂います。

もっとも、当初は、1917年、時の国際ロータリークラブ連合会会長アーチ・C・クランフの提唱による**【国際理解と親善を目的とする基金】**の設定でありました。これが、時移って1931年に**【ロータリー財団】**と名称を変更したのであります。しかし、これは名称の変更だけであってその実体は変わりません。

ロータリー財団に対する初期ロータリアンの反応は、非常に冷たかったのであります。即ち、『我々は、ロータリーに忠実であるが故にアーチ・C・クランフの提唱する基金に対して金を出すわけにはいかない』というのであります。

では、アーチ・C・クランフは、何故このような提唱をしたのでありましょうか？

そこで、アーチ・C・クランフの考え方を分析致しますと、

1．先ず第1に、第1次世界大戦の勃発により国際奉仕の必要性は高まりましたが、国際奉仕の実践は、テリトリーの遙か彼方で行われますから、当時の交通機関の発達状態からして、個人奉仕の実践は無理であります。

2．次に、ロータリー運動というものは、個人の善意を育てる運動でありますから、例会では心を求めるという精神的な親睦が本体であります。したがって、ロータリアンは、例会に集まるときはひたすら心を求めるべきでありますからロータリークラブには集金能力はありません。しかも、外国は遙かに遠いから奉仕には金がかかります。

そこで、彼は、連合会が全世界のロータリアンから無理のない金を集めて受託者になり、この金を個人奉仕に支出すれば、これが国際奉仕の実践になると考えました。

3．更に、1917年は、ライオンズ国際協会創立の年であります。この運動は、将来、ロータリーにとって脅威になるかも知れない。そこで、ライオンズに出来なくて、ロータリーに出来るものは何かと考えたときに、ライオンズは団体奉仕でありますからクラブのテリトリーの外では活動できませんが、ロータリーは個人奉仕でありますから、テリトリーの制約を受けないで、何処ででも奉仕の実践が出来ます。

そこで、連合会がこの浄財をプールして、これを個人奉仕の実践に役立てればよい、これを可能ならしめるのがこの【国際理解と親善を目的とする基金】であると考えたのであります。この点は、誠に理路整然たるものがあります。

10.『ロータリー財団』その2

前回は、ロータリー財団の前身であった【国際理解と親善を目的とする基金】についてのアーチ・C・クランフの考え方を分析して紹介しましたが、当時のロータリー主流の考え方は、彼の考え方を認めませんでした。その理由は二つであります。

第1に、国際ロータリークラブ連合会という団体の分を弁えなければならない。連合会を作ったのは個々のロータリークラブである。クラブのお陰で連合会が出来たのである。したがって、連合会がロータリークラブの権限を侵害することは許されない

第2に、ロータリークラブは、連合会に【国際理解と親善を目的とする基金】の管理など認めたことはない。にも拘わらず、連合会の会長たるものが連合会の理事会の決議も得ないで独断専行をもってこのような基金の設定を提唱するなど絶対に許されない。 これが当時のロータリーの考え方でありました。したがって、基金の提唱はしたが金は集まらない。したがって、会長のアーチ・C・クランフが赤恥をかくことになります。

さればと言って、会長の考え方は、ロータリーの原理に反します。そこで、困ったのが次年度の国際大会のホストであったカンサスシティ・ロータリークラブであります。『我々は、ロータリーの真髄に忠実なるが故に、このような原理に反する金は出したくない。しかし、金を出さないと、議案が否決されて、会長が赤恥をかく』

そこで、カンサスシティクラブが人身御供になって出した金が、僅か26＄50セントでありました。確かに、今日よりは、ドルの価値はあります。しかし、200名以上居るクラブの寄付金としては、まさにLip serviceに等しい金額であります。

しかし、兎に角基金は、実在するに至り、1927年まで国際ロータリー理事会が預かるという形になりました。この時にポール・ハリスが偉かったのは、ロータリー運動の中で色々の理論はある。しかし、神様でない者が、理屈を言ったり実践したりするのであるから、どれも満点のものはない。そこで、『自分は、ロータリー運動の生みの親として、善意で提唱され、善意で実在するに至ったものならば、例え原理的には間違っていても、その因縁は大事にしなければならない。正しいとは言わない。しかし、ロータリー運動史上、実在するに至った以上は大切にしよう』これは、ポール・ハリスのロータリー寛容論の一つの現れであります。自他を峻別して、あれは駄目だといって絶対に認めないのではなく、大きく自他を包摂して育てていくのであります。これは指導者として大事なところであります。

しかし、依然として金は集まらずに1927年まで経過するのであります。

11.『ロータリー財団』その3

前回は、ポール・ハリスが「国際理解と親善のための基金」について、善意で提唱され善意で実在するに至ったものならば、その因縁は大事にしなければならないと言ってその基金を育てようとしたが、金は集まらずに1927年まで来たことを話しました。

そこで、1927年、国際ロータリー理事会は、この基金に金が集まるようにする方法がないかと考えた時に、アメリカの国内税法上の免税措置に着目したのであります。

アメリカ国内税法上は、民間の善意を社会福祉の育成のために出した金は、企業の損金扱いにしてくれるという特例があります。そのためには、アーチ・C・クランフの基金だけでは駄目で、これを財団制度にすると、その特例が適用されます。

ただ、英米法には、財団という制度はありませんが、実質的に見て、善意に捧げられた準公共的な目的の資産を管理する制度に『信託』があります。これは、同一の目的物の上に、複数の所有権が併存的に存在し、持分権の区分がない制度をもって管理するものであり、日本の一物一権主義（所有権中心主義）の例外であり、『公益信託Charitable trust』とも『慈善の目的をもってする信託』とも呼ばれているものであります。この制度によると、これに対する募金が企業上の損金として処理することが出来ます。

そこで、国際ロータリー理事会としては、このアーチ・C・クランフの基金を信託制度（財団制度）にすれば、寄付金が増えると考えたわけであります。

そこで、1927年の国際ロータリー理事会が、この案件を提唱して準備委員会を作り、作業が完了して、基本約款が作り上げられたのが1931年のことでありました。

このようにして、『国際理解と親善を目的とする基金』は、1931年以降、ロータリー財団と呼ばれる信託財産制度によって管理されるようになったのであります。

ポール・ハリスは、信託財産制度になったときに大変喜びました。『結構なことだ。一歩前進といわなければならない』と。

しかし、全世界のロータリアンは、態度を変えませんでした。

『問題は、金を出しやすいか否か、を議論しているのではない。金を出すべきか否か、を議論しているのである。我々はロータリアンとして、個人奉仕の実践に誇りを持ち、金を出すべき時には沢山出している。しかし、この基金には金を出すべきではないと思うから出さないのである。』と。

これは、当時の一貫した論理でありました。したがって、金は依然として集まらなかったのであります。

12.『ロータリー財団』その4

前回は、ロータリアンから寄付金を集めるために『国際理解と親善を目的とする基金』が1931年以降、ロータリー財団と呼ばれる信託財産制度によって管理されるようになったこと、しかし、依然として寄付金は集まらなかったという話をしました。

このようにして、やがて、1935年を越えますと、ナチズム、ファシズムによってヨーロッパに暗雲が垂れ込めて参りました。そこでポール・ハリスは、第2次世界大戦の勃発を予防するために、若者に国際感覚を育成し、国際理解と親善のためにロータリー財団に百万ドルを集めて奨学金を支給しよう。そして、若者達に国際感覚を育成することを目的としたロータリー運動を起こそうといって自ら陣頭に立ったのであります。

しかし、金は依然として集まりませんでした。『我々は、ロータリー運動の真髄に帰依しているから、このような財団には金は出さない』という一貫した論理でありました。

結局、第2次大戦は勃発し、1945年、核爆弾によって悲惨な結果となりました。

そして、戦後2年にして1947年1月27日、ポール・ハリスがこの世を去りました。その時に、残されたロータリアン達が考えたのは、『ロータリーの生みの親ポール・ハリスはあの世に去った。しかし、彼の死を無にしないためには、彼の志を受け継がなければならない。そのためには、彼があれほど念願をもって育てようとした「国際理解と親善と平和」、「ロータリー運動の国際性」、これは疑う余地もない。したがって、ロータリー財団に募金をしよう』というスローガンになったのであります。このようにして、あれだけ忌み嫌われたロータリー財団が、ポール・ハリスの死を契機として、一躍、ロータリー国際奉仕の分野における槍舞台に立つようになったのであります。

それから、寄付が集まりだしたもう一つの理由は、1945年を越えると全世界的にロータリーを勉強することに意義を感ずる人が少なくなったことであります。このことも財団には幸運でありました。『ポール・ハリスの後に続け。金を出すことでケリがつくなら出しましょう』ということで金が集まるようになったのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーのように、『私は、ロータリーの真髄に忠実なるが故に財団に寄付しないことをもって誇りとなす』という人は少なくなってしまったのであります。但し、誤解のないように申し上げますが、これは金を出すなと言っているのではなく、このような人が居てもよいと言うだけのことであります。ロータリアンは、弱者に涙する心をもって余力のある限り寄付はするべきであります。

13.『ロータリー財団』その5

ロータリー財団への寄付について一つ注意しなければならないことは、ポール・ハリス・フェローの勧誘について、財団についての正しい理解をすべきことであります。

それは、外国との交流のない地方都市では、国際奉仕の実践の機会は殆どありません。しかし、一旦、ポール・ハリス・フェローになると、これが知らず知らずのうちに国際奉仕となるので、1000ドル出してポール・ハリス・フェローになると、恰もお寺の永代供養料のように国際奉仕の一生の仕事は終わってしまうのであるから、同じ出すなら1000ドル出しなさいよという説得をする人がありますが、これは誤りであります。

それは一体何故か。ロータリー財団は、比喩的に言えば、国際ロータリーレベルにおけるニコニコ箱であります。したがって、ロータリアンに何かの嬉しいことがあって、ニコニコ箱に金を入れても、社会奉仕の実践が全部終わったことにはなりません。もし、終わったことになるのであれば、これは正に永代供養論でありますから、1000ドル入れたら卒業証書を出そうと謂うことになります。

しかし、そうではなくて、ニコニコ箱というものは、ロータリアンに何か嬉しいことがあれば、それを記念して無理のない浄財をクラブに出しておいて、クラブが社会奉仕や国際奉仕の実践をするときに役立ててくださいよという意思表示なのであります。

したがって、これは、奉仕の実践の側から考えますと、実践を前提とする予備行為でありまして、金を出すこと自体は実践にはなりません。金を出すこと自体はあくまでも寄託行為に過ぎないのでありまして、これは奉仕の実践行為ではないのであります。

したがって、これとパラレルに考えて、この基金に金を出すことは、国際ロータリーの国際理解と親善を目的とする事業に役立ててくれという意思表示であり、それ自体は奉仕の実践にはならないのであります。したがって、これは予備行為でありますから、二回、三回と続けて金を入れてもよいのであります。また、奥様のためにしてもよいのであります。したがって、国際奉仕の実践をしたいと思えば、金を入れること以外のことをしなければなりません。例えば、ロータリー財団奨学生を推薦するとか、外国から来た学生の世話を引き受けるとかすればよいのであります。これが国際奉仕の実践になるのでありまして、ロータリー財団に金を出すこと自体は、奉仕の実践にはならないのであります。これは、奉仕の実践の予備行為であり、永代供養料にはならないのであります。ただ、誤解のないように一言付け加えますならば、例えば、災害の時に出す義捐金は、勿論奉仕の実践になります。弱者に涙を忘れてはなりません。

14.『ロータリー財団』その6

今日は、ロータリー財団の特徴について簡単にお話し致します。

元来、教育事業を主体とする善意の財団制度は、財団所在地に来た人に金を出します。

例えば、フンボルト財団は、ドイツに来た若者に金を出します。フルブライト委員会やフォード財団はアメリカに来た若者に金を出します。ブリティッシュ・カウンセル、米山奨学会皆然り、であります。米山奨学会は、片貿易だからけしからん、という声がありますが、この種の財団は片貿易が本来の姿なのであります。

ところが、ロータリー財団は、地球上の全ての人達が善意と善意を交換するという国際体験を得て貰うための制度でありますから、何処の国の若者が何処の国へ行ってもよいのであります。但し、受取機関としてのロータリークラブがなければなりません。

ロータリー財団は、このような素晴らしい独自性をもっているのであります。しかも、ロータリアン個人が奨学生の面倒を見ることが出来ます。これも財団の長所であります。これが、ロータリーの奉仕は、育てる奉仕だと言われる所以であります。

ところで、元来、財団制度は、基本元本を固定して、運用利息で事業を継続するものであります。米山奨学会もカールミラー記念財団も皆然りであります。

ところが、ロータリー財団は、そのゆとりがありません。したがって、3年間だけ元本を固定して、その運用利息で経費を補いますが、3年経つと元本を使ってしまいます。

そこで、ロータリー財団は『基本元本は全世界のロータリアンである。ロータリアンが居るかぎり、毎年、何処かから金が入って来る。これが運用利息のようなものである』
という柔軟な解釈をとります。

しかし、これは、明らかにこじつけであり、詭弁であります。しかし、このような考え方をとらざるを得ない事情にあることもまた事実であります。したがって、ロータリアンたる者は、これを助けなければなりません。全世界のロータリアンが、一定のインターバルをおいて寄付をしなければ、財団はその機能を適切に果たせないのであります。この事情を知って、多少なりとも感ずるところのある人は、温かい目をもってロータリー財団を見守ってやって欲しいのであります。

原理は原理として、助けるべきものは助ける。これが、ポール・ハリスのロータリー寛容論であります。なお、最近は、ベネファクターという、元本を消費しないで固定し、その運用利息をもって事業財源にあてるという財団本来の方式の募金も開発されているのはご承知のとおりであります。以上で、ロータリー財団の話を終わります。

15.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１

今回は、ロータリーにおけるリーダーシップについてその原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。即ち、

一般に、リーダーシップ即ち、指導性と謂うとき、それは、指導する者と指導される者という上下の関係として捉えられていますが、ロータリーにおけるリーダーシップというのは、会社のような上下関係における指導性ではありません。

会社は命令服従の縦型社会でありますが、ロータリーは横型社会でありますから、ロータリーにおけるリーダーシップは、ロータリアン全てを平等対等なものと見る社会におけるリーダーシップを意味するのであります。

したがって、ロータリアン同士が平等対等であるのみならず、ロータリアンとクラブ会長との関係、クラブ会長と地区ガバナーや地区委員との関係も平等対等であります。そして、更に謂えば、ロータリアンと地区委員や地区ガバナーとの関係もロータリアンとしては平等対等なのであります。

何故なら、国際ロータリー即ち、ＲＩの会員はロータリークラブであって、ロータリアン個人は国際ロータリー即ち、ＲＩの会員ではありませんから、そもそも両者は上下関係どころか何らの関係もないのであります。したがって、敢えて両者はどのような関係かと謂えば、やはりロータリアンとしては、お互いに平等対等だということになるのであります。

ただ、平等対等であることの意味を誤解しないように注意しなければなりません。例えば、私達の仲間は、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生に対していつも友達のような気持や態度をもって接していますが、今井先生を心から尊敬しています。今井先生もまた、私達から信頼され、慕われています。ここが大事なところであります。これをロータリーにおける「徳の支配」というのであります。

重ねて申し上げますが、ロータリーは、権力服従の縦型社会ではありません。時として、縦型社会の意識を持ったロータリアンは、今井先生に接する私達の態度を見て、あんな偉い人に対して何と慣れ慣れしい態度かと、異様なものと感じて驚くようであります。しかし、ロータリーが横型社会であることを考えれば、元来、そのような意識を持つ方がおかしいのであります。

ただ、一点注意すべきは、「親しき仲にも礼儀あり」と謂われるように、年長者に対する礼を失してはならないことは当然であります。

『ロータリーの神髄』

2680地区ロータリー教化セミナー 2008.2.17
地区研修リーダー　深川　純一

今日は「ロータリーの神髄(シンズイ)」というテーマを頂いております。神髄というのは真髄とも書きます。辞書を引きますと、どちらも同じ意味でありまして、その道の奥義(オウギ)とか蘊奥(ウンノウ)という意味であります。用語例としては「芸の神髄を究める」という言い方がありますので、今日のテーマは「ロータリーの神髄を究める」ということになろうかと思います。

只、神髄という言葉には、若干宗教的なニュアンスがあります。元来、ロータリーは一つの思想でありまして、しかもその思想は、マルチン・ルターの新教運動の最後にスイスのジュネーブで起こりましたカルヴィンの思想の系譜に属するものでありますから、キリスト教の影響があることは紛れもない事実であります。そのことは、職業奉仕をOccupational serviceと謂わず、敢えてVocational serviceと謂っていることからも明らかであります。即ち、Vocationと謂うのはラテン語でVocatio、英語でCalling、即ち、「神の思し召し」という意味であります。したがって、ロータリー創立当初の20世紀初頭の1911年、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長ベンジャミンF・コリンズBenjamin Franklin Collinsが"Service,Not self"という標語を提唱しました。即ち、ロータリーのServiceとは、自己を否定・犠牲にして、宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依することであると謂うのであります。それ以後、1912年の国際ロータリークラブ連合会会長グレンC・ミードGlenn C.Meedを初め当時の殆どの指導者がその信奉者でありました。そして、この思想は、やがて1915年サンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」の採択となって実を結んだのであります。

しかし、この「道徳律」は、最後の第11条に「黄金律」を規定しており、あまりに宗教的色彩が強いというので、1921年頃、A．F．シェルドンの提唱により、"Service above self"という標語が第1の標語となり、やがて1980年、国際ロータリーレベルにおいて廃止になりました。しかし、クラブレベル、個人レベルでは未だ脈々と生きているのであります。

いずれにしても、ロータリー思想は、宗教的な色彩を完全に払拭し得ないものでありますから、神髄という言葉を使っても違和感はないものと思います。

只、この宗教的な色彩を避ける為でもないと思いますが、神髄と同じような意味ではありますが、「原点」という言葉を使う人も居ます。ただ、神髄と原点とでは、若干言葉のニュアンスが違うと思うのであります。

私は、原点という言葉は、神髄よりも概念の幅が広いと思うのであります。即ち、ロータリーの原点といえば、ロータリーが色々な側面をもっていることから、ロータリーの思想の原点は何か、とか、ロータリーの組織の原点は何か、とか、ロータリーの実践の原点は何かというように色々な視点から分析することになろうかと思います。そして、ロータリーの原点を思想の視点から見ると、やはり

「神髄」という言葉の方が相応しいと思うのであります。

何はともあれ、言葉の解釈はこれ位にして、先ず、今日の私の話の結論を申し上げておきます。それは、ロータリーというものは、体系化された様々な原理の総体であり、それが象徴的に集約されたものがObject of Rotary即ち、ロータリーの綱領であります。元来、Object of Rotaryを「綱領」と翻訳するから判りにくいのでありまして、これは文字通りロータリーの「目的」と訳せば判りやすいのであります。正に綱領はロータリーの目指すものでありまして、したがって、綱領は、ロータリーの神髄を究めるための目標なのであります。

では、その目指すものは、具体的に言えば一体何か。それは一言で言えば親睦と奉仕という言葉に集約されると思うのであります。したがって、ロータリーの中心概念は、親睦と奉仕なのであります。

そこで、以下には、この親睦と奉仕の神髄を究めると何が出てくるのかということを論証していくことになるのであります。

さて、ロータリーは、一つの運動体であります。そしてその運動体の目指すところのものは倫理運動であります。凡そ運動と申しますものは、20世紀初頭のロータリーのようにその運動に起動力を与える時期が最も大切なのであります。 ロータリーの場合は、その時期にポールＰ・ハリスを初めアーサーＦ・シェルドン、ベンジャミンＦ・コリンズ、チェスレーＲ・ペリーなどの優れた指導者がいたことが今日の大を成した原因であろうかと思うのであります。彼らは高々と理想を掲げ、その理想に燃えて行動したるが故に様々な原理を開発し、その原理を実践して、ロータリー創立後約25年間、四半世紀の間にあの熱く燃えた素晴らしいロータリーを作り上げたのであります。そこで先ず、その原理形成の軌跡を振り返ってみたいのであります

先程申し上げましたように、ロータリーの中心概念は親睦と奉仕であります。では、何故、親睦と奉仕がロータリーの中心概念なのか。そのことを明らかにするには、ロータリークラブがこの世に生まれたロータリー濫觴の物語から始めなければなりません。

そこで今日は、入会３年未満の会員もおられるとのことでありますので、最も基本的なこともやや詳しくお話し致します。

御承知のように、先ず1905年２月23日シカゴロータリークラブが発足しました。会員達が、お互いに助け合って、楽しいクラブを作ろうと言って出発したのであります。したがって、当初、ロータリーには親睦だけがあったのであり、その当時、世のため人のための奉仕などというものは未だ影も形も無かったのであります。

実は、このロータリーの親睦を作ったのは、ロータリーの創始者ポール・ハリスでありました。彼は、1905年２月23日、シカゴの町のノース・ディアボーン街のユニティビルの711号室で３人の友達と話し合いました。

ここで、ポール・ハリスは、予て考えていたことを３人に語りかけました。それは、皆が仲良く助け合って生きていく楽しいクラブを作るためには、同業者がいると仲良くなれないから、一つの職種から一人だけ会員を選んでクラブを作ろうと提案したのであります。これを一業一会員制の原則と謂います。

何故、このような原則を決めたのかと言いますと、資本主義経済社会では自由競争原理

が支配しますから、同業者は、まさに「食うか食われるかの関係」に立たされます。したがって、同業者は、競争相手がいるが故に、お互いに心を開いて親しくなることが出来ません。したがって、俺が潰れる前に彼奴が潰れてほしい、という訳の判らない感情の虜にもなるのであります。

そこで、ポール・ハリスは、クラブの親睦を守るために同業者を排除して、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則を採用したのであります。したがって、これは、クラブの親睦を守るためにポール・ハリス自身が作った原則であり、これがロータリーという組織の原点なのであります。

そして、その1ヶ月後の3月23日には、会員9人が集まってシカゴクラブの創立総会が開催されました。この会合で、ロータリークラブという名称を決め、会長・幹事をはじめクラブの役員を決め、クラブの組織を創ったのであります。 そして、このときもう一つ重要な原則を決めました。それは、会員は4回連続して例会を欠席すると自動的に会員資格を失うという「規則的例会出席」の原則であります。これは、当時のロータリアン達は皆、零細企業の経営者ばかりでありましたから、お互いに厳しい経済状況の中で仲良く助け合って行くためには、皆仲間として必ず例会には出て来いよ、ということであります。

しかも、当時のクラブ例会は、2週間に一回でありましたから、4回連続して欠席すると2ヶ月もクラブに出てこないことになります。したがって、そんなに長い間、欠席して、お互いの安否も気遣わない、助け合いもしない、そんな冷たい奴は俺たちの仲間ではない、辞めて貰おうというのがこの原則を立てた彼らの心でありました。したがって、これもクラブ親睦を守るためにシカゴクラブが採択したロータリーという組織上の基本原則でありました。

要するに、彼らはまず、「一業一会員制の原則」と「規則的例会出席の原則」を採択し、ロータリーの最も基本的な組織原理を確立したのであります。

このようにして、ロータリーは、親睦が確保され、皆は仲良くなっていったのであります。

そこで、ロータリーは、皆が仲良くなるために、色々なことをしております。先ず、会員同士は親類付き合いをするのだから、お互いに取引をするときには利益を貪ってはならない、というので、会員に「原価の取引」を義務づけました。 更に、彼らは、物質的な助け合いのほかに、精神的にも助け合うようになりました。この助け合うということの具体的な意味は何か、と言いますと、ロータリアンは、皆職業人でありますから、それぞれ自分の企業経営上の悩みをもっています。その悩みをクラブに持ち寄って、皆で智慧を出し合ったのであります。

例えば、或る会員が「うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ」と言うと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆業界が違います。したがって、発想もアイディアも皆違います。したがって、「そのことなら私の業界ではもう解決済みだ。こうして御覧」と言って教えてくれます。

また、或る問題については、皆未だ未解決であった場合は、三人寄れば文珠の知恵と謂われるように、皆で衆知を集めて解決していったのであります。

このようにしてお互いに企業経営上の知恵

を出し合い、アイディアを交換して助け合ったのであります。したがって、恰も、クラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、会員達は次第に豊かになって行ったのであります。

このクラブ例会における「アイディアの交換」「発想の交換」の機能こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた本質的な機能でありまして、このことは当時のクラブの「綱領」にも「発想の交換」Exchange of Ideaという言葉が記されていたのであります。

ところが、1922年、この発想の交換という言葉がクラブの「綱領」から消えてしまったのであります。それは一体何故か。

彼らは、クラブ例会における「発想の交換」Exchange of Ideaと謂うことは、ロータリークラブにあっては至極当然のことではないか。そうであれば、わざわざ書いておく必要はないだろう、と謂うので、消してしまったのであります。したがって、言葉は無くなりましたが、現在も「発想の交換」Exchange of Ideaという機能は、ロータリークラブの本質的要素として厳然として存在するのであります。実は、例会に於けるこの発想の交換機能は、職業奉仕の実践の基本前提なのであります。

要するに、この時点では、ロータリーは、皆が仲良くして助け合う親睦だけの世界でありまして、ロータリーの全ての原理原則は、ただ親睦の為にのみあったのであります。したがって、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もなかったのであります。

ところが、1年半位経った頃、ドナルド・カーター Donald Carterという弁理士に入会を勧誘したところ、ドナルド・カーターは、『君達は、お互いに助け合って豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制であれば、クラブに入れない同業者はどうなるのか。また、職業人のクラブであれば、職業を持っていない一般地域社会の人達はどうなるのか。私達は、この地域社会に生まれ、地域社会で育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になっている地域社会に何らの恩返しもしない、何らの足跡も残さないで、自分達だけが、お互いに助け合って、豊かになって、やがてこの世を去っていく、そのようなエゴイズムのクラブは永続性がないだろう。そのようなクラブには入りたくない』と言って、きっぱりと入会を断ったのであります。

この報告を聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。

『ドナルド・カーターの言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう』といって、それからロータリークラブは、親睦だけではなく、世のため人のためのこと、即ち、奉仕も考えるクラブに変わっていったのであります。

そこで、ポール・ハリスは考えました。ロータリークラブは、世のため人のための奉仕をするために存在するのであるから、そのようなクラブであれば、これはシカゴの街だけにあればよいというものではない。全アメリカの地域社会にあって然るべきものである。したがって、アメリカ中の地域社会にロータリークラブを作るべきであるという考え方となり、ここにロータリーの拡大という考え方が提唱されるようになったのであります。

ところが、このようにして親睦のほかに奉仕を認めるようになったために、クラブの中

に摩擦が生じました。何故かと言いますと、親睦というのは、クラブの中で会員同士が仲良くして助け合うことでありますから、親睦のエネルギーは、全てクラブの中に向いています。

これに反して、奉仕というのは、会員以外の人達、即ち、地域社会の人達のために何かをしようということでありますから、奉仕のエネルギーは、クラブの外に向いています。このように、親睦のエネルギーと奉仕のエネルギーは、その向かっている方向が正反対なのであります。

そこで、シカゴのクラブの大多数の会員達は、自分達は、皆で仲良くして助けあって皆が豊かになるために、即ち、親睦を求めてクラブに入会したのであるから、地域社会の人達のこと、即ち、奉仕のことなど考える必要はないと考えています。

これに対して、ポール・ハリスやドナルド・カーターほかごく一部の会員達は、ロータリークラブというものは世のため人のための奉仕を考えなければ、やがて潰れてしまうだろう、という考え方であります。

しかし、奉仕などと謂うことを考えるのは大多数の会員達の反対するところであり、更に、世のため人のため即ち奉仕のためにロータリークラブを沢山創っていくというロータリーの拡大は、クラブにとっては大変荷が重い仕事であり、クラブにとっては全く余計なことでありますから、これまた大多数の会員達の反対するところであります。

このような意見の相違からクラブの中にに摩擦が生じ、クラブが荒れて来ました。ポール・ハリスは、奉仕を説きますが、大多数の会員達はこれに反対であります。さりとてロータリーの創始者ポール・ハリスを辞めさせるわけにはいかない。そこで、会員達は面白くありませんから、次第に例会に出席しなくなりました。即ち、

ポール・ハリスが奉仕を説くとクラブの親睦が崩れます。しかし、親睦を守ろうとすると奉仕を説くことが出来ません。そこでクラブは荒れに荒れるわけであります。このようにして、当初ロータリーの親睦を作ったのはポール・ハリスでありましたが、実は、その親睦を壊したのもポール・ハリスだったのであります。

シカゴクラブの初代の親睦委員長であった歯医者のドクター・ネフDr.William R.Neffはこの状況を見て、『あと一月でこのクラブもお陀仏だ。親睦委員長としてクラブを立て直すために何かをしなければならない。起死回生の策はないのか』と考えました。

そこで、彼は、クラブの会計であったハリー・ラグルスを呼びました。そして、『君は歌が上手だから、ポール・ハリスが奉仕の話を始めて皆がしらけたら、歌を唄ってくれ』と頼んだのであります。そこで、ハリー・ラグルスは、皆の気分が沈んだときに立ち上がって『諸君、歌を唄おう』といって音頭をとって、会員の心を引き立てたのであります。これがロータリーソング発祥の物語であります。

したがって、ロータリーソングというものは、どんな歌でもよいのであります。皆の心を楽しくするものであればよいのであります。

例えば、昔は兵庫県と四国は同じ地区でありましたから、高知県から出たガバナーが公式訪問に来られたときは「よさこい節」もいいでしょう。また、旧制第三高等学校出身のガバナーであれば「琵琶湖就航の歌」もいい

でしょう。但し、冬の季節に「吾は海の子」などを唄うとセンスを疑われま。また、ロータリアンの品格を疑わせるような歌は避けるべきであります。

何はともあれ、ポール・ハリスが奉仕を説いて親睦が崩れると、ハリー・ラグルスが歌を唄って親睦を回復する。するとまた、ポール・ハリスが奉仕を説いて親睦を崩す、という具合でありましたから、やはりクラブの親睦は次第々々に崩れていったのであります。

この状況を冷静に見ていたのが、1910年から32年間に亘ってＲＩの事務総長を勤め上げた偉大な組織管理者チェスレー・ペリーでありました。

彼は、自問自答します。**ロータリーにとって親睦はどうしても必要であるか。**答えは明らかにイエスであります。しかし、親睦を重視すると奉仕は出来ません。 では、**ロータリーにとって奉仕はどうしても必要であるか。**これも答えは明らかにイエスであります。しかし、奉仕を説くと親睦は崩れます。そこで親睦を重視すると奉仕は出来ません。この相反する要請を如何にして調和することが出来るかを彼は考えたのであります。

そして、1910年に至って結論を得ました。それは、クラブの中で奉仕を説くと親睦が崩れますから、奉仕のことは、クラブの中では議論しないことにして、クラブとは別枠の団体を作って、奉仕のことはその団体に任せることにすれば、親睦を崩すことなく奉仕が実現できると考えたのであります。

このように考えて、彼は、ロータリークラブとは別枠の団体を創るために、1910年、当時、全米に存在した16のロータリークラブの代表者をシカゴに集めました。そして、全クラブの同意を取り付けて出来上がったのが**全米ロータリークラブ連合会**という全アメリカのクラブの連合組織体でありました。これが現在の**国際ロータリーの前身**であります。

要するに、親睦を暖めることはクラブの中で、奉仕のことは連合会でという図式が出来上がったのであります。

このようにして、チェスレー・ペリーは、**親睦と奉仕とを調和させることに成功したのでありまして、ここに、親睦と奉仕を指導理念とするロータリーの考え方の基礎が出来上がったのであります。**

ただしかし、先ず全米ロータリークラブ連合会を創立することを16のクラブが全て承認しなければなりません。そこで議論が始まりました。

この連合組織体は、シカゴクラブよりも上位の団体としてシカゴクラブに対して命令権を持つことになる、と謂うのであれば、承認することは出来ません。

さりとて、シカゴクラブが15の子クラブを生み、その全クラブが集まって連合組織体が生まれるのであれば、シカゴクラブの**孫団体**に当たる。したがって、連合会が各クラブよりも下に位置する団体だと考えるのも論理が通りません。

このような論議に数ヶ月を要し、結局、各クラブと連合組織体とは対等の地位に立つという考え方が出るに及んで、承認決議に漕ぎ着けたのであります。

次に、**全米ロータリークラブ連合会初代会長の選任についても紛糾しました。**
シカゴクラブ以外の15クラブは、それは当然親クラブのシカゴから出すべきだと言いましたので、**初代会長は、シカゴクラブから選出することにはなったのでありますが、シカゴ**

クラブの会員達は、皆心の中ではポール・ハリスを選出すべきだと思いながらも、ポール・ハリスが1907年以降クラブ親睦を踏みにじった経緯がありますから、戸惑いがあります。したがって、何時まで経っても初代会長の選任決議が出来なかったのであります。

時のクラブ会長はAM・ラムジー A.M.Ramseyでありましたが、彼は、後に 国際ロータリーの代表として、第一次大戦後の国際連盟の会議にロータリーからオブザーバーとして出席しているほどの人物であり、彼が国際連盟の諸々の会合において、ロータリーを代表して述べた諸々のスピーチは、全世界の外交官達の心を打ったといわれるほどの雄弁家でありました。その彼がもうこれ以上選任決議を待たせるわけにはいかないと言って、会長として曰く、

「我々はロータリアンである。ロータリーを愛するが故に諸々の議論をした。議論が昂じて感情的にもなった。そして、その討論を通じて、我々は今や全米ロータリークラブ連合会を組織出来るようになり、その初代会長の選任を我々の決議に委ねられている。ロータリーにとって我々は正にエポックメイキングな時期を迎えているのであって、この重要なロータリーの発展段階において、あれは駄目だ、これは駄目だという瑣末な現象的な気持に支配されているようでは、後世のロータリアンの失笑を買うだろう。

我々が今や正に決断しなければならないことは何か、というと、ロータリー運動のこの潮流の中にあって、一体誰を全米ロータリークラブ連合会の初代会長に推挙すべきかと謂うことなのであって、これは、私個人の意見であって、会員の全てを拘束するものではないが、謙虚に振り返ってみると、その人物はただ一人しか居ない。それはポール・ハリスだ」と言って話を終えたのであります。

シカゴクラブの例会がこの時、水を打ったように静かになって、やがて発言あり。「会長！ロータリーの創立者ポール・ハリス君を全米ロータリークラブ連合会初代会長に推挙すべきことを提案します。」

万雷のような拍手がやってきました。このようにしてラムジーは、「ポール・ハリス君を全米ロータリークラブ連合会初代会長に推挙することを決定した」と宣言できるようになったのであります。

結局、ポール・ハリスが全米ロータリークラブ連合会初代会長に選ばれたのでありますが、あまりに審議が遅れたために、会長任期の残存期間が少なくなってしまいました。

そこで、これでは、あまりに気の毒だというので、もう一度、1911年からの会長職を務めることになったのであります。

ところで、ポール・ハリスは、会長として暖かく迎えられて、深く反省するところがありました。自分の考え方の誤りは一体何処にあったのか？

ポール・ハリスは、1907年から親睦団体であるロータリークラブに奉仕の概念を入れようとしました。この時のポール・ハリスの考え方は、『始めに親睦ありき』、その上に高次の概念としての『奉仕』が出てきました。

そして、これが親睦より高次の概念である以上は、それが親睦と相容れない時には、親睦を抑えて奉仕が生きるべきだと言う立場をとりました。その結果、当然の事ながら、親睦が崩壊してしまったのであります。

ポール・ハリスは、ロータリーにおける親睦と奉仕とを上下の関係において捉えたこと

の誤りに気づきました。即ち、

『親睦と奉仕とを等位の概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。したがって、親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る』

と悟ったのであります。

ポール・ハリスは、その気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文【レイショナル・ロータリアニズム】"Ratioinal Rotarianism"であります。

これは、ロータリーの思考というものは、合理的な立場から考えると一体どのような特徴を持った思考なのかと謂うことを解説したものであります。

ポール・ハリスは、1910年、全米ロータリークラブ連合会の初代会長に選任せられた時から稿を起こし、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だロータリーに機関誌というものがありませんでしたので、これを発表する場がありませんでした。

そこで、チェスレー・ペリーに相談したところ、チェスレー・ペリーは喜んで、彼が編集委員長になって出来上がったのが、ロータリーの機関誌【ザ・ナショナル・ロータリアン】"The National Rotarian"であります。そして、これは、やがて1912年、ロータリーが国際的に発展するに及んで"The National Rotarian"のNational という言葉がとれて現在の【ザ・ロータリアン】"The Rotarian"となったのであります。

これが、この論文を巻頭論文としたロータリーの公的機関誌創刊号発刊の物語であります。時に、1911年1月26日のことでありました。

このため、国際ロータリー理事会は、古くから1月26日を含む1月最後の1週間を【雑誌週間】と名付けて、全世界のロータリアンに対して、ロータリーの公的機関誌である"The Rotarian"の購読を勧誘するスピーチをして貰いたいと提唱してきたのであります。

ところが、近年、この雑誌週間が雑誌月間となり、しかも1月から4月に変更になりました。その理由をＲＩ理事会に問い合わせますと、単なる事務管理上の都合だということでありました。歴史的に意義のあるこの週間がこのような理由で簡単に変更されてしまったことは誠に淋しいことであります。

ところで、ポール・ハリスは、この巻頭論文【レイショナル・ロータリアニズム】において、**『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】(toleration)と答えるであろう』**と言っています。

これがポール・ハリスのロータリー理論でありまして、ロータリーイコール寛容、所謂**『ロータリー寛容論』**であります。したがって、彼は**『ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る』**と大悟したわけであります。

ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の世界の中にロータリーはある。これがポール・ハリスのロータリー理論でありました。

私は、このことを**『親睦なくして奉仕なし。**

奉仕なくして親睦なし』と集約しているのでありまして、親睦と奉仕とは、正に密接不可分な表裏一体の関係にあるのであります。そして、この二つは、正にロータリーの中心概念であり、謂わばロータリーの核にあるものなのであります。ロータリーを一言で言えば何か。それは親睦と奉仕である。では、ロータリーの親睦とは一体何か。ロータリーの奉仕とは一体何か。ロータリーを突き詰めて考えると結局この二つの言葉に集約されるのであります。1927年、ＲＩ理事会は「我々は言うべきことは全て言い尽くした。しかし、為すべきことは未だ何一つ為されていない」として、四大奉仕部門を確立し、原理探求のロータリーから実践のロータリーへと邁進していったのであります。

まさに、20世紀初頭の25年間の原理探求のロータリーで開発された様々な原理を集大成して、ロータリーを一言で言えば何か。それは親睦と奉仕であると集約出来るのであります。したがって、これが「ロータリーの神髄」にある考え方なのであります。

以上を要するに、ロータリーが、その思考の体系として、その外延（外堀）を確立したのは、1910年、ポール・ハリスが『ロータリーは、寛容の中に宿る』と自覚した時であります。したがって、1910年までは、無反省的な、無意識的な原理の開発に過ぎなかったと謂うべきであります。即ち、ポール・ハリスが「ロータリーは寛容の中に宿る」と自覚した時に、ロータリーの意識的な体系的思考の外延が完成するに至ったと謂えるのであります。

これを思想史的な視点から見ますと、ロータリーの思想の原点が据えられたのは、実は1905年ではなく、1910年のことであったと謂えるのであります。それまでは、無意識的な無反省的な試行錯誤の期間であったと謂うべきであります。このようにして、ポール・ハリスが1910年に「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と自覚した思考が実は「ロータリーの神髄」にある思考なのであります。

そして、この思考が象徴的に文章化されたものが「ロータリーの綱領」なのであります。綱領は「ロータリーとは何か」ということを簡明直裁に書き上げたドキュメントでありまして、ロータリーの核にあるものであり、正に「ロータリーの神髄」なのであります。この故に綱領は、謂わばロータリーの般若心経であるとも謂われているものなのであり、ロータリアンにとって一番大事なものなのであります。

ところで、時間の関係で、ロータリーの綱領の解説はあとに譲ると致しまして、ポール・ハリスが説いた「ロータリー寛容論」は、実は非常に東洋的な発想に基づくものと私は思うのであります。蓋（ケダ）し、初期ロータリーは、1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」、就中その第11条の「黄金律」に象徴されるようにこれはキリスト教の色彩の非常に強いものでありましたが、実は、ポール・ハリスの提唱した「ロータリー寛容論」は、その思想を越えるもののように考えられるからであります。

哲学者田中忠雄先生の説によりますと、イギリスの世界的な論客アーノルド・トインビーは『キリスト教的不寛容では、現代の対立を救い得ないという発想から、アジアの精神的基盤に人類の運命の希望を繋ぐ』という予感を述べています。

殊にアジアの精神的基盤である「禅」の神髄は、明らかに「寛容」にあります。それは、多くの流派を擁しながら、度量の狭い縄張り争いをしたことは非常に少ないのであります。禅の訓練は峻烈を極めたものではあっても、なお仏陀の慈悲を背負っています。慈悲とは他者の身になって感ずるという人間最高の能力のことであります。それが正に「寛容」ということの真義なのであります。

私は、昨今の国際社会、殊にアメリカを中心とする様々な対立の状況を見るとき、誠にアジアの寛容こそは、今や、世界救済の原動力でなければならないと思うのであります。

また、昔、イタリアのアンドレ・オッティ首相は、マルタ島で開かれた世界宗教者会議において、『宗教家は、「寛容」と謂うことを説くが、自分を絶対視して相手を許す、というのは「寛容」ではない』と言い切っていますが、誠に傾聴すべき見解であると思うのであります。

「寛容」について哲学者田中忠雄先生は、仏陀の教えにある「一水四見（ケン）の譬え」ということを説いておられます。この話が判ると、人間は度量が大きくなって「寛容」になれるようであります。その要旨は次のとおりであります。

先ず、「天人（テンニン）」は水を珠玉と見るというのであります。その意味は、天人が羽衣で水面を羽ばたくと、水滴が飛び散って玉となり、七つの色に光るというのであります。したがって、天人にとっては、水が珠玉に見えるのであります。

ところが「鬼畜」は、水を濃血と見ます。その意味は、鬼畜が水に入ったら、忽ち七転八倒して苦しんで死にます。したがって、鬼畜にとっては水が忌まわしい濃血に見えるのであります。

これに反して、龍魚は水を宮殿と見ます。龍魚にとっては、水ほど住みよい場所ありませんから、龍魚にとっては水は金殿玉楼であります。もし、誰かが龍魚に向かって、「お前の住んでいるその宮殿は、実は流れているのだよ」と言えば、龍魚は「そんな馬鹿なことがあるか」と一笑に付してしまうでしょう。

そして、最後に、人間は「水」を「水」と見るのであります。

そこで、道元禅師は、「随類（ズイルイ）の所見不同なり」と謂われたのであります。「天人」「鬼畜」「龍魚」「人間」という具合に、それぞれ類に従って見るところが違うのであります。したがって、人間も自分達が水を水と見るからといって、他の種族も同じく水と見なければならないと強いることは出来ません。人間も、やはり多くの種族の内の一つにすぎないのであります。人間だけが「水それ自体」とでも謂うべき客観的真理を知っているわけではありません。これを道元禅師は、「本水（ホンスイ）なきが如し」と言われたのであります。

珠玉でもなく、濃血でもなく、宮殿でもなく、水でもなく、本水（本当の水）というようなものが別にあるわけではないのであります。仮に、そのようなものがあるとしても、どうして人間がそれを知ることが出来るでしょうか。人間が知るのは、やはり「随類の所見」の一つとしての水に過ぎません。

然るに地上の人間は、随分思い上がって、宇宙を自分中心にばかり考えます。便所の糞壷が汚いものだとばかり思いこんで、それが、ウジ虫達にとっては無上の楽園であることを忘れています。

この思い上がった独りよがりの人間中心主義の思想が根本になって、人間の間にも独り

よがりの「非寛容」が出てくるのであります。

宇宙が人間の為に存在するかの如く錯覚したのと同じ原理で、世界や社会は一民族、一国家、一階級のために存在するかの如く思いこんで行動します。そこに、救われ難く対立する「二つの世界」の葛藤が生ずるのであります。

刻々に起こる国際的並びに国内的な一切の問題は、例外なく「一水四見の理」で動いています。左とか右とかの色分けで、自分の主張を絶対化し、自分だけが正義だと思いこむ悪習から速やかに脱却する必要があると思うのであります。したがって、正にアジアの道に参ずるべきであります。東洋思想には本当のゆとりがあると思うのであります。

また、今日の「ロータリー教化セミナー」という場合の「教化」という言葉にも注意が必要であります。今から約20年余り前に評論家の草柳大蔵先生が一燈園という修養団体で話されたことを御参考までに紹介しておきます。即ち、

パリで世界情報会議というのがありました。この情報という言葉を言語辞典で引いてみますと、伝達という意味はないのでありますが、研究社の新英和大辞典には出ています。コミュニケーション（Communication）とかコミュニケート（Communicate）と謂って、本来の意味は、思想を伝達するとか、聖体を授けるという意味、即ち、「聖体拝受」という意味であります。

これはキリスト教用語であって、「聖体拝受」でありますから一つの聖体に神が居ます。その神に繋がっている人、同じ神を信仰している人の間に伝達が行われる、これがコミュニケーションという言葉の内容であります。

そこで、アメリカの学者が言いました。

『我々は今一つの神を設定して、その神に対して認めるか認めないか、それから始めなければならない。そして、この一つの神以外のところに居るのはエキストラ・コミュニケーション（Extra-communication）である。これは「蛮族」である。したがって、キリスト教の原理をもって、この蛮族に属する人達をコミュニケーションの聖体拝受の世界に引き入れなければならない。コミュニケーションというのは、第一義は「聖体拝受」ということ、それは一つの神を皆が仰ぎ見ていることである。一つの神のもとにコミュニケーションが行われるのである。』

と言ったのであります。

まさにそこに「教化」という思想が出てくるわけであります。神を知らない人は「教化」しなければならない。アメリカ側の学者は、今日の情報工学の基礎にあるものはコミュニケーションだというわけであります。

その話が終わると、ドイツのヤスパースという哲学者が立ち上がりました。

『何を言うか。傲慢不遜も甚だしい。曾て、アーノルド・トインビーは、西洋文明は没落すると言った。その一番大きな原因は、「非寛容」の原理である。キリスト教文明が作った現在の西洋文明の基礎にあるものは、「非寛容」である。即ち、自分の神以外のものを認めない、それで教化をして自分の中に取り入れている。このようなことをしていると、非常に固い社会になってしまう。したがって、今の西洋文明を壊さないためには、「寛容」の原理をもったインド文明を取り入れなければならないというのがトインビーの文明論である。したがって、あなた方がエキストラ・コミュニケーションだと言っているところの方、即ち、共通の神を抱かないところの

方がコミュニケーションが実際に良いではないか。例えば、東洋はどうか。シンガポール、台湾、韓国、日本、言ってみれば皆儒教文化の国である。儒教文化の国の方が経済成長率が良いではないか。キリスト教国のアメリカ、ヨーロッパは経済成長率が低いではないか。ところがニックスといわれる国、儒教圏の国々は何れも高い経済成長を遂げている。何も経済成長率が高いから良いと言うのではないが、経済成長が高いと謂うことは、社会のコミュニケーション Communication がうまくいっていると謂うことである。活性化しているということである。生き生きしているということである。したがって、「聖体拝受」などということを言って、自分達の考え方しかないと思っていると、ヨーロッパ、アメリカは益々没落するだろう。』と言ったのであります。

実は、ヤスパースは、神を抱かない日本という国をよく知っているのであります。日本を良く勉強していて、日本には神などは存在しない。日本人は、結婚するときは神道でやって、人が死ぬと今度は仏教になって、12月末になると一晩だけキリスト教になる。では日本はアニミズムAnimism（精霊信仰）かというと、アニミズムでもない。要するにいい加減なんだというのであります。彼は日本をよく知っているのであります。

ヤスパースは続けます。『日本はじめ東洋の国は「仁」の国である。キリスト教国は神を中心として「聖体拝受」によるコミュニケーションと言っているが、社会が活性化している国は、「仁」を中心としてコミュニケーションがあるというのであります。「仁」とは何か。書いて字の如く、人が二人居ると謂うこと、二人の人という意味である。Aさんは、自分が生きているのはBさんが居るからだと考える。Bさんは、自分が今日あるのはAさんのお陰だと考える。このようにお互いの存在を支え合っているというこのコミュニケーションが基礎にある社会が一番強い。

謂わば、神を中心にした「聖体拝受」におけるにおけるコミュニケーションはロジカル（Logical）のコミュニケーション、即ち、「論理」である。

これに対し、「仁」の方は、エコロジカル（Ecological）のコミュニケーション、これは「生態」という意味、即ち、生きていく姿である。

ロジカルとエコロジカル。「論理」のコミュニケーションと「生態」のコミュニケーションがある。これからは、謙虚にエコロジカルのコミュニケーション、即ち、「仁」の思想によるコミュニケーションを考え直すべきである』

とヤスパースは言うのであります。

実は、この考え方は、20世紀初頭のロータリーの考え方、即ち、ポール・ハリスが、「ロータリーは寛容の中に宿る」と説いた考え方に通じると思うのであります。「仁」は東洋の哲理、その核にあるものは「寛容」であります。「聖体拝受」は西洋の哲理、キリスト教の哲理、その核にあるものは「非寛容」であります。これは一神教の哲理であります。

ところで、1910年、親睦と奉仕の調和の中にロータリーは宿る、したがって、ロータリーは寛容であると大悟したポール・ハリスは、自ら敬虔なクリスチャンであり、キリスト教の「非寛容」の世界に住む人でありました。にも拘わらず、彼が敢えて東洋的な「寛容」の哲理を説いたということは誠に驚くべきことだと思うのであります。この意味にお

いて彼は偉大なる思想家であると思うのであります。彼自らはいみじくも、『自分はロータリーのデザイナーに過ぎない。ロータリーのビルダーは、チェスレー・ペリーである』と言っていますが、彼は単なるデザイナーではなく、正に偉大なる思想のデザイナーでもあると思うのであります。

このように致しまして、ポール・ハリスが1910年、『ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る』と大悟した境地は、まさに「ロータリーの神髄」に当たるものなのであります。

重ねて申し上げます。『ロータリーとは寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。決して自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の世界の中にロータリーはある。』これがポール・ハリスのロータリー理論でありました。

私は、このことを『親睦なくして奉仕なし。奉仕なくして親睦なし』と集約しているのでありまして、親睦と奉仕とは、正に密接不可分な表裏一体の関係にあるのであります。

では、この「ロータリーの核」にある考え方、「ロータリーの神髄」を文章として明確に表現しているものは何か、と言いますと、それが「ロータリーの綱領」であります。したがって、”綱領を知らずしてロータリーを説くことなかれ”と言われているように、綱領を身につけることはロータリアンであることの絶対条件なのであります。にも拘わらず、最近は、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということを耳にします。これは誠に由々しきことであります。昔は、このようなことは絶対にあり得なかったのであります。

曾て、昭和15年9月11日、東京ロータリークラブの解散を最後に軍閥の弾圧によって壊滅した日本のロータリー。その時の全日本のロータリアンの人数は僅かに2，142名。今のロータリーから見ると一地区にも満たない誠にささやかなロータリーではありましたが、皆、強者揃いの粒選りのロータリアンでありました。したがって、ロータリークラブは壊滅しても、ロータリー運動は止めなかったのであります。ロータリーはアメリカのスパイの手先だとか、フリーメイソンの隠れ蓑だとか謂われ、憲兵隊や特別高等警察（特高）に逮捕されるかも知れないという身の危険をも顧みず、恰も「隠れキリシタン」のようにロータリー運動を続けていった我々の先輩達の強靱な魂を忘れてはならないと思うのであります。

ところが、今はどうでしょうか。ロータリーの綱領も知らず、ロータリーの魅力も判らないままに簡単にロータリーを退会していく会員が増えています。これは明らかにロータリーの衰退を物語るものであります。ロータリーが衰退すれば、会員の増強など出来る筈がありません。会員を増強しようと思えば、先ず、ロータリアンの「内なる人」を強くして、魅力のあるロータリーを作ることであります。ロータリーに魅力が出来れば、会員は自然に増えるのであります。国際ロータリーが退会防止などという馬鹿げた恥ずかしいことを謂う必要もないのであります。

さて、ロータリーの綱領は、ロータリーの般若心経ともいうべきものでありますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していなければならない問題なのであります。そこで、綱領には一体どのようなことが書いてあるのか。

ロータリーの綱領は、『ロータリーとは何か』ということを簡明直裁に書き上げたドキュメントでありまして、ロータリアンにとって一番大事なものなのであります。したがって、綱領を知らなければロータリアンとは謂えないのであります。

ロータリーの綱領は、二つの部分から成立っています。即ち、先ず最初の部分は、ロータリーを一言でいえば何か、ということを書いた部分であり、これが綱領の本文であります。ただ、本文は一言でロータリーを定義したものでありますから、非常に抽象的であります。したがって、何通りにも解釈されることにもなり、実質的な意味内容が千差万別なものになる虞があります。そこで、それを補うために解釈原則(構成要素)を1.2.3.4.と書いているのであります。

そこで、この綱領の第1から第4までの中で特に象徴的なものは何かと言いますと、それは、綱領の第1の「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと」という部分であります。これは、ロータリーにおける親睦と奉仕というものを判り易く文章化したものであります。

先ず、どのようにして親睦を作るのか。その方法は、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則であります。

先ず、1905年2月23日、ポール・ハリスによって「親睦のための一業一会員制の原則」が採択され、次いで1908年、アーサーF・シェルドンによって奉仕概念が誕生し、ここで、一業一会員制の原則は、「奉仕のための一業一会員制の原則」としても理論付けられたのであります。

(註)「奉仕のための一業一会員制の原則」とは、地域社会に存在する全ての職種の横断面を捉え、一つの職種から一人ずつ良質な人をロータリーに入会させ、その人をロータリーの代表(大使)として、その人の業界に奉仕の心を蔓延させることによって業界を改良しようとするもの。

ここに一業一会員制の原則は、親睦と奉仕の二面性を持つに至るのであります。これがロータリーにおける「基本原理の確立」であります。

要するに、綱領の第1は、親睦と奉仕の規定。親睦とは何か、奉仕とは何か、を規定しているのであります。

そして、これを受けて綱領の第2は、親睦によって作られた「奉仕の心の内容」を規定しています。Object of Rotary即ちロータリーの目的は一体何か。それは1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「ロータリーの道徳律」がその要旨において述べているように、それは「倫理」であり、「愛」であると謂えるのであります。これがロータリアンの「個人倫理の確立」であり、ロータリーが倫理運動であると謂われる所以であります。時に1915年のことでありました。

そして綱領の第3は、親睦によって作られた「奉仕の心の適用」即ち愛と倫理を実践すべきその実践の対象について規定しています。即ち、奉仕の心を家庭生活、職業生活そして社会生活に適用すべきこと、即ち、「奉仕の心の実践」を説いているのであります。

そして、このことについての象徴的なドキュメントが1923年のセントルイスの国際大会における決議第23－34号であり、奉仕の実践の在り方を詳細に規定しているのであります。これがロータリーにおける「実践原理の確立」であります。時に1923年のことであり

ました。

最後に綱領の第4は、奉仕の実践の対象の内、特に国際社会への実践を規定しています。世界平和のために、愛の心を全世界の地域社会に適用すべきことを説いているのであります。時に1921年のことでありました。

元来、一般的奉仕クラブの綱領としては、第1に奉仕の心を作る規定、第2に奉仕の心の内容の規定、第3に奉仕の心の適用・実践の規定によって完結するのでありますが、ロータリーは、奉仕の心を提唱するばかりに、心というものが、地域社会の延長線上に国際社会をも包摂することが出来ます。その結果第一次世界大戦を契機に国際奉仕の分野を開発したのであります。

そして、ロータリーの奉仕哲学を突き詰めていくことによって、ロータリーの国際奉仕というものは、人類平等の思想を広め、それをもって戦争の再発を防止し、人類の平和と繁栄に寄与するという大変重要な要素をもっていることを自覚するに至ったのであります。

そして、これは、ロータリーの奉仕の世界の終着点でありますから、何とかしてこれを綱領に書いておく必要があると考えまして、1921年のエディンバラの国際大会において、国際奉仕の概念を完成してこれを宣言し、その文言が、そのままの形で綱領の第4として付け加えられるに至ったのであります。

以上がロータリーの綱領のごく簡単な概要であります。この綱領をしっかりと心の中に植え付けていることが、ロータリアンであるための絶対条件なのであります。したがって、ロータリーの綱領は「ロータリーの核にあるもの」なのであり、正に「ロータリーの神髄」と謂うべきものなのであります。

以上を要するに、20世紀初頭に開発された様々な原理、即ち、1905年に確立されたロータリーの基本原理、それに基づく1922年に確立されたロータリーの組織原理、1915年に確立されたロータリーの個人倫理、1923年に確立されたロータリーの実践原理、そして1921年に確立された国際奉仕の実践原理、これらの諸々の原理の集大成がロータリーの綱領に凝縮されているのでありまして、その中心概念が正に「親睦」と「奉仕」なのであります。

このように致しまして、以上に申し述べましたことは、1923年時点において、綱領を指導理念としたロータリー運動全体の体系化が完成されたことを物語るものなのであります。まさに、ロータリーは体系化された思考なのであります。

私は、従来は例えば職業奉仕とか職業倫理とかロータリー財団とかのように個別的なテーマによりロータリーを説いて参りましたが、今回の「ロータリーの神髄」というテーマによって、初めて体系化されたロータリーの全体を俯瞰する話が出来たと思うのであります。

実は、この素晴らしいロータリーの全体系を、私達の先輩達は、創立後約25年間、四半世紀の内に創り上げたのであります。

ところが今はどうでしょうか。ロータリーの拡大、会員増強によって巨大な組織になるに従ってロータリアンの質が落ち、国際ロータリーの決議機関である規定審議会が民主主義の欠点である多数決原理によって衆愚政治化し、1968年以降、ロータリーの核にある原理原則を殆ど失ってしまったのであります。この衰退したロータリーを蘇(ヨミガエ)らせる起死回生の策は一体何か。私は、須(スベカラ)くあの熱く燃え

た「20世紀初頭のロータリーに還れ」と謂いたいのであります。

もし、このままに事態が推移するならば、ロータリーは壊滅してしまいます。ロータリーという形骸は残るかも知れません。しかし、最早それは魂の抜け殻、ロータリーの亡霊に過ぎません。昔、誰かが警告したように、Rotary rest in peace !「平和の中に横たわるロータリー」即ち「死せるロータリー」にならないか。

私は、これが杞憂に終わることをただこれ祈るのみであります。御静聴有り難うございました。

以上

あとがき

2001年、竹中会員の発案から始まった例会での「ロータリー３分間情報」、深川先生の『純ちゃんのコーナー』も７年の年月を重ねてきました。冊子も７冊を数えるに至りました。毎回お話しいただくのは、「３分間」ですが、そこには、ロータリー精神が凝縮され、積み重ねられた回数に「継続は力なり」という言葉を思い出します。

ここに７冊目となる冊子が完成しました。一つ一つのお話しの多くは、短くまとめていただいています。しかし、折に触れて開いていただくことによって、深遠なロータリー世界の神髄にきっと近づいていただけることでしょう。

最後になりましたが、献身的なご尽力をいただきました深川先生、小西会長、冨田幹事をはじめとする会員皆様、そして事務局のご協力に深謝いたします。

伊丹ロータリークラブ　2007～2008年度　雑誌・ロータリー情報委員会